

読書尚友

11/60

古典六十選
…グループ代表阿部伸一郎…

「小林 一茶俳句集」

「読書をして昔の賢人を
友にする」と



一茶 1763~1827

小林
一茶

1763~1827



せんとらるライナー一日車掌

高校中退後 実家を手伝いながら

独学で司法書士試験に合格

中村 良太さん 30歳

恵那市大井町

今年の司法書士の姿に憧れつた。その後、以前「当食堂車」で手に職もない。江戸へ出た後の数年間の消息は不明

成美と言ふ著名な遊俳の業

俳となつた。このお陰で一

商人は遊俳と呼ばれた。

そんな折、一茶は久しぶりに故郷に帰つた。そのこと、畠仕事中の父が

お気持つて

「お茶を

うございました。

お茶の目

前で倒れた。傷

寒(腸チフス)

いう重い

病だつた。一茶は暫く柏原

に残り看病を続

け父の死を

看取つた。この間の父を慕

う氣持つて

継母や仙六との

いさかいの様子を「父の終

焉日記」に残して

いる。い

さかいの主因は死の直前に

ある信濃國柏原(現信濃

町)の農家に一茶は生まれ

た。三歳で母を亡くす。

八歳の時に父が再婚し、異母

兄弟の仙六が生まれた。

しかし、継母とも仙六とも不

仲だつた一茶は十五になる

と江戸へ奉公に出された。

奉公と云つても口実で、実

際は口減らしだ。また子供

で手に職もない。江戸へ出

た後の数年間の消息は不明

だが、おぞらくその日暮ら

しの生活を送っていたと思

われる。俳諧の道に足を踏

み入れたのは二十五の頃。

「目に青葉

山ほどときぎ

初鑑」の句で知られる山口

素堂を祖とした葛飾派に師

事していたことが判つてい

る。一茶は地方に点在する

葛飾派を稼ぎ場とし

るや業俳を抱えた。こうし

た商人は遊俳と呼ばれた。

一茶が三十六歳の時に夏目

豈美と云ふ著名な遊俳の業

俳となつた。このお陰で一

茶は一流との評判を得る。

そんな折、一茶は久しぶりに故郷に帰つた。そのこと、畠仕事中の父が

お気持つて

「お茶を

うございました。

お茶の目

前で倒れた。傷

寒(腸チフス)

いう重い

病だつた。一茶は暫く柏原

に残り看病を続

け父の死を

看取つた。この間の父を慕

う氣持つて

継母や仙六との

いさかいの様子を「父の終

焉日記」に残して

いる。い

さかいの主因は死の直前に

ある信濃國柏原(現信濃

町)の農家に一茶は生まれ

た。三歳で母を亡くす。

八歳の時に父が再婚し、異母

兄弟の仙六が生まれた。

しかし、継母とも仙六とも不

仲だつた一茶は十五になる

と江戸へ奉公に出された。

奉公と云つても口実で、実

際は口減らしだ。また子供

で手に職もない。江戸へ出

た後の数年間の消息は不明

だが、おぞらくその日暮ら

しの生活を送っていたと思

われる。俳諧の道に足を踏

み入れたのは二十五の頃。

「目に青葉

山ほどときぎ

一茶の目の前で倒れた。傷

寒(腸チフス)

いう重い

病だつた。一茶は暫く柏原

に残り看病を続

け父の死を

看取つた。この間の父を慕

う氣持つて

継母や仙六との

いさかいの様子を「父の終

焉日記」に残して

いる。い

さかいの主因は死の直前に

ある信濃國柏原(現信濃

町)の農家に一茶は生まれ

た。三歳で母を亡くす。

八歳の時に父が再婚し、異母

兄弟の仙六が生まれた。

しかし、継母とも仙六とも不

仲だつた一茶は十五になる

と江戸へ奉公に出された。

奉公と云つても口実で、実

際は口減らしだ。また子供

で手に職もない。江戸へ出

た後の数年間の消息は不明

だが、おぞらくその日暮ら

しの生活を送っていたと思

われる。俳諧の道に足を踏

み入れたのは二十五の頃。

「目に青葉

山ほどときぎ

一茶の目の前で倒れた。傷

寒(腸チフス)

いう重い

病だつた。一茶は暫く柏原

に残り看病を続

け父の死を

看取つた。この間の父を慕

う氣持つて

継母や仙六との

いさかいの様子を「父の終

焉日記」に残して

いる。い

さかいの主因は死の直前に

ある信濃國柏原(現信濃

町)の農家に一茶は生まれ

た。三歳で母を亡くす。

八歳の時に父が再婚し、異母

兄弟の仙六が生まれた。

しかし、継母とも仙六とも不

仲だつた一茶は十五になる

と江戸へ奉公に出された。

奉公と云つても口実で、実

際は口減らしだ。また子供

で手に職もない。江戸へ出

た後の数年間の消息は不明

だが、おぞらくその日暮ら

しの生活を送っていたと思

われる。俳諧の道に足を踏

み入れたのは二十五の頃。

「目に青葉

山ほどときぎ

一茶の目の前で倒れた。傷

寒(腸チフス)

いう重い

病だつた。一茶は暫く柏原

に残り看病を続

け父の死を

看取つた。この間の父を慕

う氣持つて

継母や仙六との

いさかいの様子を「父の終

焉日記」に残して